

仏教を学ぶのはなぜか

中学3年 渡辺 悠平

私は浄土真宗の学校に通っているため、仏教、特に浄土真宗の教えに触れる機会を多く頂いている。仏教の授業で習う教えには、共感できるものが多いが、時には疑問に思うものもある。事実だけを習う五教科とは異なるため、私は仏教を特殊な教科だと思っている。

それでは、なぜ私達は仏教を学ぶのだろうか。私は仏教を「心の勉強をする教科」と思っているが、心の勉強ならば、小学生の「道徳」の方がより合っているような気がする。仏教は宗教であり、道徳の授業で習ったこととは何かが違う。また、理科や社会のように暗記する訳でもなく、数学や理科のように論理的な解釈ができる教科でもない。では、私は宗教とどのように向き合っていくべきなのだろうか。私が考えた向き合い方は二種類だ。

一つ目は、自分自身の考え方や思想の模範とするという向き合い方だ。すなわち、自分の考えが偏らないように、宗教の教えを鏡のよう使うことで、思想を修正していくというやり方である。この方法を効果的なものにできるかは、選ぶ宗教による所が大きい。私は、他人を傷付けることがない限り、どんな宗教でも信じて良いと考えて

いるが、思想の修正に適した宗教は人によって大きく異なる。よって、自分に合う宗教を見つけ、それを見本として人生を歩んでいくことが、宗教との正しい向き合い方なのではないだろうか。

しかし、現実には宗教の違いなどによる紛争が起こり続けている。それぞれが自分の信じる宗教を持っていて、それらが食い違うことで、戦争の原因となる。ここで必要なのが、私が考える二つ目の「向き合い方」であり、それは「他人の宗教や考えを受け入れる」こと、「多様性を認める」ことである。他人の意見に耳を傾けることができれば、紛争の状況は改善するはずだ。また、この考え方は宗教による争いに限ったものではない。多くの差別問題や、友人関係においても同じことが言える。相手の意見を受け入れることは、良い関係を築き上げるために非常に大切なことであり、そのためには思考の柔軟性が必要だ。

このように、宗教は「自分の考えを持ち、他人の考えを受け入れる」ために学ぶのである。これは仏教の教えと重なる部分が多く、私は仏教の教えを勉強できることに感謝しなければならない。また、仏教という教科は、「自分の考えも他人の考えも受け入れる勉強」なのだから、学ぶ内容が事実ではなく考えであるというだけで、五教科と比べ

て「特殊」なものではないのかもしれない。

では、私は仏教の教えを実践できているのだろうか。そうとは言い
難い。自分の考えはしっかりと持つことができていると思うが、他人
の考えを受け入れられていないことがよくある。今後は仏教の授業
を通して、多様性を受け入れられる人間に成長していきたい。